

エルサ・ベスコヴの絵本の絵を分析する

スウェーデン語専攻 奥山津久海

目次

1. はじめに
2. 研究背景
 - 2.1. エルサ・ベスコヴの生涯
 - 2.2. エルサ・ベスコヴの先行研究
 - 2.3. エルサ・ベスコヴ画風の確立
 - 2.4. スウェーデンにおける絵本分析
3. 分析手法
 - 3.1. 分析する絵本について
 - 3.2. 分析理論 Painter et al.(2013) について
 - 3.2.1. 対人的機能
 - 3.2.2. 観念構成的機能
 - 3.2.3. テキスト形成的機能
4. 絵本の分析実践
 - 4.1. 『ペレのあたらしいふく』
 - 4.1.1. 対人的機能分析
 - 4.1.2. 観念構成的機能分析
 - 4.1.3. テキスト形成的機能分析
 - 4.2. 『もりのこびとたち』
 - 4.2.1. 対人的機能分析
 - 4.2.2. 観念構成的機能分析
 - 4.2.3. テキスト形成的機能分析
5. 分析結果のまとめ
 - 5.1. 画風からみる考察
 - 5.2. 時代背景からみる考察
6. おわりに

要旨

エルサ・ベスコヴ(Elsa Beskow, 1874-1952)は、19世紀末から20世紀半ばにかけて活躍したスウェーデンの代表的絵本作家であり、20世紀の絵本出版に功績を残したと言われている。スウェーデンに限らず世界中で、彼女の作家像や文章に対する文献は多く見られるものの、絵に対する分析は多くない。その理由の一つとして、絵本の絵を言語的に分析する優れた理論枠組みが確立されていなかったことが挙げられる。その中で、2013年にClare Painter, J.R. Martin & Len Unsworthらによって*Reading Visual Narrative: Image Analysis of Children's Picture Books* (『視覚的ナラティブを読み解く：絵本の絵の分析について』, 2013) という絵本の絵を分析する理論を提示した著書が発表された。この著書では、絵や文章の構成が読者にどのような効果をもたらすのかを分析した理論に焦点が当てられている。

本稿では、エルサ・ベスコヴの絵本が今日まで支持され続けている理由を明らかにすることを課題とし、ベスコヴの生涯と思想を踏まえた上で、彼女の「絵」そのものに注目して分析する。つまり、ベスコヴの挿絵をPainter, et al. (2013)の理論を用いて分析し、挿絵が読者にどのような効果を与えているのかを明らかにするものである。

第二章では研究背景として、ベスコヴの生涯や画風が成立するまでの過程、また絵本分析の先行研究を紹介した。ベスコヴは幼少期から絵を描くことを好み、この頃から童話や絵本を作りたいと考えていた。また女性解放家エレン・ケイとの関わりもあり、独立した女性観やこども観を持っていたことがわかった。ベスコヴの絵のスタイルは、ウィリアム・モリスやウォルター・クレインの影響を受けている。19世紀後半は植物など有機的なモチーフを用い、曲線で柔らかい色合いの画風が広まり、その影響も受けていた。

第三章では、分析する二冊の絵本『ペレのあたらしいふく』(*Pelless nya kläder*, 1910)と『もりのこびとたち』(*Tomtebo barnen*, 1912)の紹介と、分析理論Painter, et al. (2013)の詳しい解説を行った。この二冊は同時期に描かれたものでありながら、一方はリアリズム作品であり、もう一方はファンタジー作品である。またともに先行研究が豊富で、比較しやすいことからこの二作品を分析対象として選んだ。

分析理論Painter, et al. (2013)によると、絵本の絵には主に3つ

の意味機能がある。登場人物同士や登場人物と読者の関係を表す「対人的機能 (Interpersonal Meaning)」, 物語の内容や描写を表す「観念構成的機能 (Ideational Meaning)」, そして絵や文章のレイアウトを表す「テキスト形成的機能 (Textual Meaning)」である。これらの機能について, 例を用いて説明した。

第四章では, 『ペレのあたらしいふく』, 『もりのこびとたち』を「対人的機能」「観念構成的機能」「テキスト形成的機能」の面から分析した。それに加えて分析理論に基づく絵の分析のみならず, ベスコヴの人生や当時の社会状況という観点からの分析も加え, ベスコヴの絵本が読者にどう受容されているかを述べた。

第五章では, 第四章を踏まえ, 明らかになった二作品の共通点と相違点を述べた。また, それぞれの絵が読者に与える効果を述べたのち, ベスコヴの生涯や時代背景を考慮し, 彼女の絵を総合的に考察した。

ベスコヴはキャラクターをロングショットで描き, 一定の距離感を保つことで, 読者に安定した印象を与えている。彼女は 19 世紀後半の画法や日本の浮世絵からの影響を受け, 読者に親しみやすく懐かしさを感じさせる絵を描いている。また, 彼女の絵はデザイン性が高く, 現代の日用品にも広く使用されている。白黒の絵を用いる一方で, 色の統一に工夫を凝らした作品もあり, 彼女の絵は物語の想像力を引き出す配置や分割方法も特徴的であることがわかった。ベスコヴの平面画法は装飾性と写実性, デザイン性を組み合わせ, 独自の世界観を表現している。

また, ベスコヴの絵は 1900 年頃の時代背景を反映し, 手仕事や農村生活に焦点を当てている。彼女は手仕事の重要性を強調し, 社会的変遷に敏感に対応した画風が評価された。性別や社会的立場の描写においては, 当時の男女の役割分担を表現しつつ, その問題にも言及している。絵本は児童中心主義や個性尊重を取り入れ, こどもの自主性を奨励している。またベスコヴの絵本は時代の生活経験に共感を呼び起こし, 大人も楽しめ, 読み聞かせとしても適していることがわかった。

以上により, ベスコヴの絵本はその美的な価値だけでなく, 教育的な視点や当時の思想という点からも重要であることがわかり, 読者に永続的な影響を与えると結論づけた。今回の研究を踏まえて, 絵本を選定する場合や絵を研究する際に必要な「絵の言語化」を可能にしたといえる。